

第3回 仙台市総合計画審議会議事概要

この議事概要は、事務局の責任においてとりまとめた速報であり、事後に修正する可能性があります。なお、正式な議事録については、別途ホームページに掲載しますので、そちらをご覧ください。

日 時	平成22年3月25日（水） 10：00～12：00
会 場	仙台市役所2階 第一委員会室
出席委員	足立委員、阿部初子委員、石川委員、内田委員、江成委員、大滝委員、大村委員、岡本委員、小野田委員、菊地委員、小松委員、佐竹委員、菅井委員、鈴木由美委員、西大立目委員、針生委員、樋口委員、増田委員、間庭委員、宮原委員、柳生委員、柳井委員 [22名]
欠席委員	阿部一彦委員、大草委員、鈴木勇治委員、高野委員、永井委員、西澤委員、庭野委員、水野委員 [8名]
仙 台 市	企画市民局長、企画市民局理事、企画市民局次長、総合政策部長、総合計画課長、総合計画課主幹(1)
次 第	1 開会 2 議事 (1) 100万市民の政策提言について (2) 新基本構想の具体的検討に向けた方針について (3) その他 3 閉会
配 付 資 料	1 仙台市総合計画審議会委員名簿 2 「100万市民の政策提言」の概要 3 起草委員会の審議経過について 4 新基本構想の具体的検討に向けた方針（案） 5 新基本構想の都市像（たたき台） 6 審議会日程（案）

会議の概要

開会

- ・事務局から、山田明之氏が委員を退任し、永井幸夫氏が新たに委員に就任した旨報告した。

議事

(1) 100万市民の政策提言について

- ・事務局から、資料2を基に説明を行った。

<主な意見等>

- ・市の政策に若者の意見を反映させるための工夫が必要である。
- ・パブリックコメントも同様だが、市に寄せられた提言に対しては、対応・反応を示す仕組みをつくるべきである。

(2) 新基本構想の具体的検討に向けた方針について

- ・起草委員会委員長である大滝委員から、資料3、資料4及び資料5を基に説明し、その後、意見交換を行った。

<主な説明>

(資料4について)

- ・新基本構想の構成は、現行と同様、「策定の趣旨」、「都市像」、「施策の基本方向」及び「基本構想の推進」の4部構成としたい。
- ・策定の趣旨は、人口減少等の時代認識とともに、仙台の個性の大切さ、「行動する市民力」を原動力として都市像を実現していくことの重要性を明確に打ち出したい。
- ・「行動する市民力」とは、市民・NPO・企業・行政等のそれぞれがまちづくりの主体となって、対等な立場で自律と責任を持って公益活動を担いながら、新たな公共的な課題に取り組み、新しい価値を創造していくことである。
- ・まちづくりの主体には、町内会等の地縁団体、PTA、大学、商店街なども含まれている。また、NPOには、NPO法人だけではなくボランティア団体やサークル団体など民間ベースで非営利活動、つまり公益活動を行う団体すべてを指している。
- ・公益活動については、公共利益を目的とする社会的、公益的な活動を広く含めており、行政の仕事はもちろん、企業による社会貢献活動なども含む。
- ・公共的な課題の解決に取り組みながら、仙台の個性を生かして新しい価値を創造していくという一連の行動のダイナミズムを「行動する市民力」というキーワードで表している。
- ・都市像は、現行の4分類が仙台の歴史的蓄積としての「健康都市の風土」、「杜の都の風土」、「中枢都市の機能」、「学都の知的資源」から導き出されたものであって、これらは現在においても仙台の特長であり、21世紀中葉を想定した将来像においてもこの4分類を基本とする概念としたい。
- ・施策の基本方向は、資料4 - 別添資料1を踏まえた上で必要な見直しを行いたい。
- ・基本構想の推進は、「行動する市民力」を育て、強めていくための都市経営のあり方、協働・連携のあり方、行政の政策形成過程における市民参加・参画の手法などの議論を深めたい。

(資料5について)

- ・都市像が新基本構想で最も核となる大切な部分であるため、委員の意見を踏まえつつ原案を固めていきたい。たたき台の表現や単語、キーワードについては議論を尽くしたのではなく、方向性や考え方の大枠を示したものと理解してもらいたい。
- ・現行都市像との大きな違いは、市民の側からの表現、つまり、主語が都市とかまちではなくて市民になっているところである。
- ・冒頭の「未来に恵みと希望を伝える仙台」は、21世紀中葉に目指す都市像そのものではなく、将来に向かって持続的に取り組む市民活動、都市活動の姿を表現したものである。
- ・仙台独自の資源を再発見・再構築して、息吹を吹き込み新しい価値を創造するために「行動する市民力」によって仙台と市民生活の豊かさを実現していく。その豊かさは「健や

かな暮らし」、「自然との共生」、「世界に生きる東北の力」、「未来を築く学び」という4つの大きな柱、仙台の個性に磨きをかけていくことで実現するものであって、それらの恵みと希望をはぐくみながら未来へ継承していく。このような姿をコンパクトに表現したものである。

- ・都市像については、審議会の議論を取り入れて起草委員会でさらに議論を深め、中間案原案を策定したい。たたき台について忌たんのない意見をいただきたい。

<主な意見等>



- ・「未来に恵みと希望を伝える仙台」という言葉があるが、「行動する市民力」とか「市民の底力」とか、あるいは「未来への責任」とか「子供たちの未来のために」など、個別の計画にも共通するキーワードを最初に置き、仙台市はこういう方向に向かっていく、あるいは、市民みんなが参画するのだということを示してはどうか。
- ・「行動する市民力」の考え方に賛成。例えば、市民の行動が活発になると、マイカー利用をはじめ人の移動が増えるかもしれないが、そのようなとき、この考えと「自然との共生」とをどのように調和させるかが課題となる。市民一人一人がものの考え方を変えなければならない場合もあるだろう。
- ・第1回審議会で市長が、仙台ならではの光が見えるものをと話していた。起草委員長の報告を受け、「行動する市民力」が大きなキーワードで、これがまさに光になるものと考えた。
- ・東北人は、行動するよりもむしろ少し待つ気質があるのかもしれないが、これからは自分たちがアクションを起こしていく時代なのだと、考え方あるいは価値観を変えていくということを明記するほうがいいのではないか。
- ・「行動する市民力」というキーワードを多用するのであれば、シンプルに「行動する市民の力」とか「主体的な市民力」、あるいは「市民の行動力」など、市民がすんなり受け入れられるような言葉に研ぎ澄ましていく必要があるのではないのか。
- ・市民力の最先端で実際やっている立場にあるが、行動したいと思ってもできない仕組みがあるなど、市民が力を出せないと感じることが多い。実際、やっているところは相当やっている。それを評価したり、モデルとしてアピールしたりしていかないと、市民力は言葉では出るけどもなかなか実態に結びつかないことになる。
- ・「市民」がだれなのかわかるようにすべき。ここに暮らす人だとか、自分のことだと思えるような言葉になるといい。行動する市民としてしまうと、自分は市民じゃないからといったこともありうるかもしれないので、もう少し検討したいし、検討していただきたい。
- ・市民一人一人が、市のため、自分の地域のため、社会のために何がやれるのか主体的に考えられるような施策や考え方が必要。
- ・基本構想を考える際、人口フレームと財源をどう考えるのかは非常に重要。数10年後には間違いなく仙台市の人口が減る。さまざまな都市機能、財政的にも施策的にもその規模に合わせていくというような方向を、構想の検討課題として含まないとさまざまな弊害が起きるだろう。

- ・「新基本構想の具体的検討に向けた方針（案）」に掲げられている時代認識は、全国で共通するものと思われる。「行動する市民力」を前面に出すのは基本的によいのだが、具体的な中身において仙台市の特徴を出さねばならない。
- ・人口減少に関しては、それに対応する施策の具体的な内容で示すこととし、言葉自体は後退するようなイメージなので使わないほうがいいのではなかろうか。
- ・起草委員会の議論において見えてきたことがある。ひとつは、行政間の垣根を外さねばならないということ。ひとつの施策がさまざまな分野につながっていくような仕組み、また、行政の組織を検討していかなければならない。もうひとつは、予算の問題とも関連するが、市民と行政が連携しないと何も動かない時代がやってきているということ。そういう逼迫した状況が、市民力という表現の中に込められている。あともうひとつは、現場で動こうとしたときにぶつかる規制の壁。こうしたものを外していくための仕組みづくりを市民が主体的にやっていかないと、力を引き出すことができないということ。
- ・基本的なところは異論もなく、総論では大賛成である。ただし、資料5をはじめとして、新しい価値観とか新しいという言葉が非常に多く見受けられる一方、残すべき伝統とか歴史的なものはほとんど触れられていない。残すべきところは残すことを明確にしながら、それと新しい価値観との融合ということをうまく取り入れられたら、仙台らしさが見えてくるのではないだろうか。
- ・起草委員長より、市民目線で基本構想をつくり上げたいという報告があったが、これに賛成である。また、資料4にあるような構成にすることについても賛成である。しかし、「策定の趣旨」とか「都市像」といった言葉自体については市民目線ではないと思われるので、表現を変えるべきである。
- ・他都市の基本構想を見た中では、京都市のものが興味深かった。書きぶりが「わたしたち京都市民は」と、主語が市民になっている。「市民」が漠然としている、だれなのかははっきりしないという議論があったが、今回策定するのは仙台市の基本構想であるわけなので、「仙台市民」というような形とするほうがよいのではないか。市民力とか行動力のその最たるものは、「わたしたち」がだれなのかをしっかりと基本構想の中に盛り込んでいくことと、先ほどの市民目線の表現をどう考えていくかというところに、より具体的な方向性だとか、市民が共感するような言葉が盛り込まれることなのではないか。
- ・まちづくりは人づくりがベースにあるのだろうと考えている。その観点から見ると、子供の教育に関しては記述があるが、市民力を支えるための、市民活動の人材とか、あるいは税収を支えるための産業、それを支える人材の育成とか、そうした記述も欲しいと感じる。
- ・市民協働は当然うたわれているが、現状では丸投げ型の協働など、協働とは言えないような形がまだまだ多く、協働の本当の部分を仙台市職員がどのくらい理解して行動しているのかも見えない中なので、丸投げ型の協働のようなものではないということを、どのように盛り込んでいくのか検討する必要がある。
- ・人口に関しては、20世紀は国全体では上り坂だったが、2000年前後に大体峠に来て、そして今度は逆にずっと下り坂に入っていく。我々はそういう非常に大きなターニングポイントの中で計画をつくらねばならない。しかし、人口減少は必ずしも悲惨なものでは

ない。20世紀のヨーロッパは元気がなくなりながらも、ずっといろんな形で維持してきたというようなこともある。そのため、自分たちなりの生活の仕方をしっかりつくっていけば、まだまだいろんなことができるというような枠組みの中で、仙台市のよさというのをどう発揮していくかというのがテーマなのだと考える。

- ・東北は国内でも人口減少が大きい地域である。その中で仙台の存在感は大きく、東北からの人口流入が進行するかもしれない、仙台はどのように周辺を支えるのかといった、これまで余り考えなくてもよかったテーマが出てくるおそれもある。そのような社会状況の中での仙台の役割について、市民力という言葉の中でどう考えるべきか。
- ・かつて道普請は市民力でやっていた。経済がよくなって、行政のお金でできるようになったが、今はそれが怪しくなりかけている状況にある。そのため、市民力というのはある意味では格好いい話だが、ある意味では、やむにやまれずというところもあるかもしれないと考えている。それでもよりよい楽しい幸せをどうやってつくるかと動いていかねばならないのだろう。

そのようなことを全部総合計画でとらえようとしても恐らく無理であろう。総合計画は市役所の憲法みたいなものなので、市職員が動くときにこのようにしてくれればよいというように、切り口が明確であればいいのではないかと考える。

- ・起草委員会においては、「世界に生きる東北の力」などの4つの横軸を、縦の軸でそれらをどのようにドライブさせるかということについても議論した。なお、資料3～5参考資料1の後ろから2番目の図にある、が縦の軸である。「世界に生きる東北の力」などの4つの軸を横ではなく縦に切ると、が出てくる関係で、中心にある「行動する市民力」をきちんと吸い上げる仙台型の新しい公共モデルをつくりあげねばドライブしないということである。
- ・市民の力をどのように吸い上げるか議論しているが、パブリックインボルブメントの仕組みをきちんとつくり、そこに新しい仙台としてのアイデンティティをつくっていけばよい。では、何を問題にすればよいのか。これまでの市民参画ではどうしても取引コストが大きくなるし、参加した結果がみんなに配慮した非常に平板でつまらないものになってしまう。専門家が参画して、選ばれた人がかっ達に議論する、その透明性が担保されていれば全員の意見を聞く必要はなく、よりよい結果が得られる。これはパブリックインボルブメントガイドラインと言われているが、こうしたものをきちんとつくっていき、市の施策に反映していくようになれば、市民参加には縦割り関係はないので、横串で物事をつないでいったパイロットプロジェクトが連なり、仙台が非常に個性的なまちになって、人口が減った中でも国際的な都市関係を築いていけるのではないかと考える。
- ・総合計画でできることは、経済状況を変えとか新しい産業を興すとかいうことより、むしろそのような仕組みやきっかけをきちんとつくっていくということなのではないか。
- ・ただし、以上のような縦軸の話は、横で切らなければならない総合計画にはなかなか乗りにくい。これをわかりやすく伝えれば、市民や委員の皆さんに共有してもらえるのではないか。
- ・施策を中心に横割りするということだが、縦割り行政や垣根や規制を超えていくために

は、資料5にある、「守りたい価値」「育てたい価値」「伝えたい価値」という観点から切り崩してはどうだろうか。

行政はそれぞれの施策を実施する責任を持っているので、縦割りは悪いと言われるものの、縦割りについてはきちんと行ってもらわねばならない。一方でその境界線上の問題にも取り組んでもらわねばならない。つまり、縦も横も共存して成立するよう、その仕組みづくりこそが必要。

- ・そのポイントになるのは市民参画で、プロジェクトごとにきっちりやるということ。そして、市民参画のもとでは、言いたいことを言って終わりにするというのではなく、ルールに従って今までにないジャンプをすることである。「守りたい価値」などについては、そこでの議論となるだろう。
- ・「行動する市民力」については、行政側の働きかけや提案により行動を促されているようで、市民自体が自分たちで考えて行動するという部分の記述が若干薄い印象がある。市民が自発的に取り組めるような市民の視線に立った文章の表し方、また、将来に向け、自分たちが活躍して新しい仙台像をつくり上げていくとの表現が欲しい。
- ・市民の範囲に行政も入り込んでいいのかとの思いを抱いたが、起草委員会での議論はどうだったのか。

これまでは、市民と行政とは別のものとして考えてきている。今回は市民というものを広くとっているが、それがかえってわかりにくくなっているというのは先ほど指摘されているところ。だれがどのような役割を持つのかということについては、もう少しきめ細かな書き分けが必要。あるいは、全体をひっくるめて市民と言うときには何を期待してそのように表現するのかははっきりさせねばならない。この点については起草委員会でなお検討させてもらいたい。

- ・総合計画の策定にあたって、規模の小さい自治体では地区別懇談会などを基礎とし、そこでの議論を積み上げて市民の総意をとらえるという方法もあるが、100万の人口を抱える仙台では今のところあまりできていない。市民と行政の関係についてどこまで踏み込んでいくかは、この審議会で位置づけることになる。
- ・「わたしたち仙台市民は」という主語を使うということであれば、行政が市民の名前をかたってそのような記述をしたことになってしまうので、基本構想の策定後、それをどう読むか、あるいは、それにしたがって何をするのかということを積極的に働きかけねばならないだろう。今回の総合計画は市民に働きかけをするところまで枠を広げる第一歩だと考える。
- ・ワークショップを積み上げて総合計画を策定するといった手法は確かに仙台では難しい。市民参加のガイドラインをきちんとつくって、市民との対話のインターフェイスを認知し合う手続をどのようにするかを考える必要がある。
- ・基本構想は最終的には行政が施策を展開していく際の、考え方の道しるべとなるものである。そのため、個性的なものであるべきか否かという観点もあるが、むしろ、使い勝手のいいものをつくり上げることが審議会に求められていると考える。ひとつのやり方としては、定量的なものと定性的なものにきちんと分けて、定量的なものについて数値目標を立てることが考えられる。もうひとつは、横串の施策を盛り込むことが考えられ

る。

- ・ 現行基本構想でもパートナーシップをうたっているが、具体的にどのようにするのかはなかなか難しい。NPO活動をする中で、どの行政主体のどの部門と話し合いをすべきかわからなかったり、行政主体相互の協力が必要なのにそれぞれのルールのためにうまくいかなかったりすることがある。市民の力で、ということであれば、このようなことをどう変えていくか具体的に議論しなければならないだろう。
 - ・ 資料5に関しては、 の環境の部分に仙台市としてのグリーン・ニューディールについて議論できるように視点を残してもらいたい。また、 に関して、学都を単に大学などで学ぶ若者が多いととらえるのではなく、市民一人一人が学びたいことを学ぶことができるまちであるということ含むものととらえてもらいたい。
 - ・ 資料5の 環境に、仙台の都市を取り巻く田園地帯についての視点も盛り込むべきではないか。
 - ・ 都市像の表現について、「わたしたち仙台市民は」とする提案については、基本構想の法的位置づけを含め、事務局から判断材料を示してもらいながら、起草委員会で議論したい。
 - ・ 資料5に関連し、特に の環境にいくつか指摘があった。都市像には具体的なことまでは書き込む必要がなく、原案の程度でよいと考えていたが、再考してみたい。
 - ・ 総合計画について、行政が市民に向けて発するものであるという考え方と、市民が自ら読んで自ら活動していくものであるという考え方とがあり、どちらにウエイトを置くべきか考えながら議論を聞いていたが、京都市のようなものにしたいほうが、市民が関心をもって、自らの力を発揮していこうと考えてくれるのではないかと印象を持った。
 - ・ 人口減少が現実のものとなる中での総合計画を策定するので、新しい一歩を踏み出すような、印象の強いものに仕上げたいとの思いがある。ただ、行政側から「わたしたち仙台市民は」といった言葉遣いをするのは、それを市民がどのように受け止めるのか、また、市の職員がその言葉にどのくらい自分を入り込ませて受け取るのかを計りながらでないと難しいかもしれない。
 - ・ 環境を例にとっても、交通や土地利用など都市構造の問題や、低炭素社会を推進するための産業技術の問題とか雇用の問題とかいろいろなものが関係してきており、それは資料5の4つのテーマすべてにわたって相互に関連しているということ、さらには企業や市民や行政やNPOというプレーヤーがお互いに役割を果たしていることを起草委員会で議論してきた。本日いただいた意見も踏まえ、今後の起草委員会でさらに議論していきたい。
 - ・ 多くの市民は仙台市に総合計画があることを知らずに生活しているので、策定後は、それが指針であり憲法のようなものであるということを示す必要があるだろう。
 - ・ 都市像については、4つに変わりはないが、それぞれに具体的にどのような言葉を据えるかによって、その目指すべき方向性や中身が違ったものになるのではないかと。もう少し方向性が見える言葉を使ってもいいのかもしれない。
- ・ 起草委員会委員長である大滝委員から、以上の議論を踏まえて、起草委員会のおおよその方針に

ついて説明があった。

- ・基本構想は長い文章を書いていくものではないので、ある程度コンパクトでまとまりがある文章の中に押し込める作業が必要。基本的には各委員の意見をできるだけ反映でき、かつ、ある程度コンパクトにまとめる作業をしていきたい。
- ・主語を「わたしたち仙台市民は」とすることは基本的にはよい方向と思うが、審議会にも、市の当局も、そして何よりも仙台市民にも相当の覚悟を期待することになるので、単に文章の記述の仕方を変えていくということ以上のことを踏み込んで考えていかねばならない。審議会でそこまでの覚悟を決意してコンセンサスを得られるのかは、なお議論し、意見をもらいたい。
- ・総合計画を、行政の政策・施策の設計図・指針というように狭くとらえるとしても、政策等の決め方や意思決定のプロセスを変えていくということをしっかりと位置づけねばならないと考えている。このように踏み込んでいこうとすると、上述のことと同じような問題が出てくるので審議会委員各位から意見をもらいながら進めていきたい。

< その他の意見等 >

- ・メディアをもっとうまく使うことができないか。審議会でも市民について議論していても、ホームページや市政だよりなど行政からの発信のみになってしまう。市民感情を巻き込むためにも、メディアに、市民目線で議論がなされていることを伝えてもらえないだろうか。
- ・総合計画にぶら下がる部門別の計画の改定が同時進行しているので、それらについての情報を出してもらい、基本計画とどのようにつなげるかという議論をしていきたい。

(3) その他

- ・事務局から、資料6に基づいてスケジュールの説明を行った。